

前書き

著者	木部 暢子
雑誌名	日本の消滅危機言語・方言の文法記述
発行年	2022-03-31
URL	http://doi.org/10.15084/00003546

前書き

国立国語研究所・特任教授 木部 暢子

本書は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（2016～2021年度）の調査にもとづく、各地の文法記述を収録したものです。

周知のように、いま、世界中のマイナー言語（弱小言語）が消滅の危機に瀕しています。2009年、ユネスコは世界の消滅危機言語リストを発表しました。その中には日本で話されている8つの言語－アイヌ語（北海道）、八丈語（東京都）、奄美語（鹿児島県）、国頭語（鹿児島県・沖縄県）、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語（以上沖縄県）－が含まれています。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではありません。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされています。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成して、これらの言語・方言の継承活動を支援することが、このプロジェクトの目的です。

このプロジェクトにおける言語・方言の調査は、(1) 共同研究員がそれぞれのフィールドで3点セット（語彙集、文法記述書、談話テキスト）を作成するために、6年間にわたって行う調査、(2) 1地点において集中的に行う合同調査の2種類からなっています。本書は(1)の調査による文法記述書を集めたものです。ちなみに、(2)の合同調査の報告書は、国立国語研究所学術情報リポジトリ¹と危機言語DBのホームページ²で公開していますので、興味のある方はご覧ください。

ここに収めた文法記述の地点数は11地点で、内訳は東日本方言3地点、西日本方言3地点、北琉球方言4地点、南琉球方言1地点です。日本全国にきれいに分散する結果となりました。このプロジェクトの前身である「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」（2010～2015年度）のときには、ユネスコの消滅危機言語リストのうちの6つが奄美・沖縄の言語だった関係で、調査地点も奄美・沖縄に偏っていました。しかし、上に述べたように、日本全国の方言もまた、危機に瀕しています。そこで、2016年から始まった本プロジェクトでは、本土の方言をできるだけ調査地点に加えるようにしました。本書に東北地方の方言の文法記述がないのが残念ですが、その代わりに、合同調査では青森県むつ市、八戸市で調査を行い、報告書を作成しています。（2011年3月に起きた東日本大震災の影響もあったかもしれません。）

11という地点数は、予定よりだいぶ少なくなっています。これには、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020年4月から対面調査がまったくできない状況になったことが関係しています。フィールドワークを主体とする私たちの研究にとって、新型コロナウイルスの影響は甚大です。これにより、文法記述書の作成を諦めざるをえなかった地点がかなりありました。ただ、消

¹ 『国立国語研究所学術情報リポジトリ』

https://repository.ninjal.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=346&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=21

² 『危機言語DB』 <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/reports.html>

滅危機言語・方言の調査をこれ以上、遅らせるわけにはいきませんので、今後、調査の方法を考えなければ、と思っています。

本書の編集プロセスについて、少し説明しておきます。2016年にこのプロジェクトが始まったときに、文法記述書を作成するのに必要と思われる文法項目を設定しました。それは次のようなものです。①代名詞、②指示詞、③数、④格、⑤動詞活用、⑥ヴォイス、⑦テンス・アスペクト、⑧形容詞、⑨文のタイプ、⑩名詞述語、⑪待遇、⑫疑問文、⑬情報構造など。これらは九州大学の下地理則氏を中心としつつ、本プロジェクトに参加した若手研究者が議論を重ねて作成したものです。各項目には、さらに体系を記述するための調査例文がついています。プロジェクトの参加者はこれをもとに調査を進め、文法記述書を作成しました。したがって、本書所収の各地点の文法記述書の構成は、この項目を踏襲する形になっています。また、本書への掲載にあたっては、各投稿論文につき共同研究員それぞれ2名が査読を行いました。査読を引き受けてくださった共同研究員のかたがたには深く御礼申し上げます。

2010年に前身プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」を始めたときに、いろいろな方から「本当に危機言語・方言を守ることができると思っているのか」と言われました。言語・方言の記録・記述は、私たちの専門です。したがって、言語・方言の記録・記述は、できるだけ多くの地点で行おうと思っていましたが、言語・方言の継承については、じつは私も半信半疑でした。しかし、前身プロジェクトと本プロジェクト、あわせて12年間、各地の言語・方言の調査や継承活動に携わってみて、今ははっきりと言うことができます。「危機言語・方言を守るのは、私たちであって、あなたも当事者の一人なのだ」と。今、守らなければ多くの言語・方言は永遠に消えてしまいます。逆に言うと、今、守れば次の時代に残ります。キーを握っているのは私たちなのです。

最後になりましたが、このプロジェクトには2022年3月現在で78名の共同研究員のかたに参加いただいています。共同研究員の協力のおかげでプロジェクトもこの報告書も無事、完成させることができました。特に数多くの共同研究員のご協力のもとで、本報告書に納められている論文の査読を実施しました。共同研究員のかたがたに厚く御礼申し上げます。

国立国語研究所の危機言語のプロジェクトは、第4期（2022年度以降）も続きます。この『文法記述論集』を手にとってくださいましたかたがた、第4期も是非、危機言語プロジェクトにご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

2022年3月